

〔研究論文〕

## 渋沢敬三の民俗学におけるマテリアルカルチャー論の再考 －映像人類学の社会的意義と役割－

田淵 俊彦

〔Article〕

### Shibusawa Keizo's Ethnography: Rethinking the Theory of Material Culture The Significance and Role of Visual Anthropology in Society

Toshihiko TABUCHI

#### Abstract

Recently, researchers and academics have been actively involved in solving the problems encountered by the society, organizations, and people to improve the situation. In particular, in Europe and the United States, attempts at “intervention” by using videos have been successful, and highly applied visual anthropology has is known as “Applied Visual Anthropology.” As if anticipating these trends, a person conducted steady fieldwork and recorded people’s lives on film before World War II. Keizo Shibusawa, a pioneer of ethnographic film in Japan, was born as a grandson of Eiichi Shibusawa, known as the “father of Japanese capitalism.” He studied biology; he exhibited his collection of toys, folk tools, and other specimens in the attic of his house and called it the “Attic Museum.” This essay examined “another perspective” in research conducted by Keizo Shibusawa that has been commonly overlooked. First, I will discuss the early days and development of visual anthropology, which has recently been applied to solving social problems and discuss why anthropology has started the medium of video. Furthermore, I will examine the position of Shibusawa’s ethnography in history and the validity of his theory of material culture incorporated into his fieldwork. By examining the footprints of Shibusawa’s fieldwork and highlighting “another perspective” in his research, I will present a new evaluation of Shibusawa’s folklore. Drawing upon this “another perspective,” I will identify the purpose of Shibusawa’s fieldwork. Furthermore, I will examine the reasons for Shibusawa’s use of video as a medium. Finally, I aim to clarify the role of video in anthropology and the significance of visual anthropology in the society and to suggest future possibilities of visual anthropology and its the role.

#### 序

近年、社会や組織、人々が抱える問題に研究者や学問が積極的に関わることで事態の改善を図る取り組みが広がっている。特に欧米では映像を活用した「インターベンション *intervention* (干渉・介入)」による試みが成果を上げており、応用性の高い映像人類学は「応用映像人類学 *Applied Visual Anthropology*」と呼ばれている<sup>(1)</sup>。こういった趣向を予見したかのように、フィールドワークを通して人々の風俗や習慣を映像に記録し続けることで社会の問題点を照射しようとした人物がいた。

それは第二次世界大戦以前のことである。日本における映像人類学の先駆者とも言える渋沢敬三は「日本資本主義の父」と呼ばれる渋沢栄一の孫として生まれ、学生時代には生物学を志した。そして収集した玩具や民具などの標本を自宅の屋根裏部屋に展示して「アチックミュージアム *Attic Museum* (屋根裏の博物館)」と名づけた。東京帝国大学を卒業した後は祖父・栄一に請われ実業界に入り、二足のわらじを履くような形で民俗学研究に携わった。この「渋沢民俗学」は数々の業績を残したが、先行研究においては渋沢の「民俗学からの視点」に対する評価に留まっている。本論は、渋沢民俗学を発展させることとなった渋沢の「もう1つの視点」を発掘する。そのために以下のようなアプローチを行う。

まず映像人類学の特徴を理解するために、その草創期を紐解き人類学がなぜ映像という媒体を用いるようになったのかを探る。次に歴史上における渋沢民俗学の位置づけを行い、渋沢がフィールドワークに取り入れたマテリアルカルチャー論の妥当性を検証する。また渋沢のフィールドワークの足跡を洗い直し、これまで見過ごされてきた「もう1つの視点」の存在に光を当てる。そして渋沢が「もう1つの視点」から何に迫ろうとしたのかを看破する。同時に渋沢がその実現のために映像を媒体とした理由についても吟味してゆく。これらの作業には著者のドキュメンタリー制作の経験知が役立つ。著者は20年以上にわたり世界の途上国における人々の生活や営み、文化、習俗に関するフィールドワークを行い、その成果をテレビ・ドキュメンタリーという形で発表し続けてきた。テリトリーはヒマラヤ周辺のチベット文化圏をはじめとしてアジア、アフリカ、南米大陸最南端にまで亘っている。近年では、映像人類学からのアプローチによって途上国における婚姻形態の考察<sup>(2)</sup>やジェンダーに関する社会問題解決を模索する研究を行っている<sup>(3)</sup>。それらの専門知を応用することで、俯瞰的な視座と広い視野で渋沢民俗学を見つめ直し、再構成することができるだろう。そして最終的には渋沢敬三が映像人類学を通して伝えたかったことを明確化し、社会における映像人類学の意義と果たすべき役割を提示することを目的としたい。

## 1. 映像人類学のはじまりと植民地主義

本節では、映像人類学の成り立ちについて歴史の流れに沿って整理する。人類学は早くからフィールド調査にカメラやマイクを持ち込み、映像技術の活用を試みてきた。1895年のリュミエール兄弟(オーギュスト・リュミエール *Auguste Marie Louis Lumière*、ルイ・リュミエール *Louis Jean Lumière*)によるシネマトグラフの発表以来<sup>(4)</sup>、民族誌の記録映画が盛んになってゆくが、その本格的なはじまりはフェリックス＝ルイ・レニョー *Felix-louis Regnault* が同時期に紹介したアフリカのセネガルに居住する民族ウォロフの生活を撮影した映像である。レニョーは1895年から2年の歳月をかけて、人々の踊りや供儀の様子、調理やろくろによる陶器の作成過程、歩く、走る、木に登る、飛び跳ねるといった行動の映像を記録した<sup>(5)</sup>。しかし、レニョーは未開人の動きや身振りを文明人の身体技法と比較することの興味に終始し、総合的な文化比較にまでは及ばなかった<sup>(6)</sup>。その後1898年にケンブリッジ大学が組織したトレス海峡の調査で、人類学者アルフレッド・コート・ハッドン *Alfred Cort Haddon* は現地のダンスや儀式を撮影した。1930年代にはグレゴリー・ベイトソン *Gregory Bateson* とマーガレット・ミード *Margaret Mead* がバリとニューギニアにおいて16ミリフィルムを用いた本格的調査を行った<sup>(7)</sup>。そのような流れを経て第二次世界大戦後、ジャン・ルーシュ *Jean Rouch* らによって映像人類学が確立されてゆく。ルーシュは研究者と現地の人々が「撮る経験」「観る経験」などを通して映像を共有する中に文化人類学の可能性を求めようとする「共有人

類学 *Shared Anthropology*』という概念を提唱するに至った<sup>(8)(9)</sup>。

ここで人類学がなぜ映像という手段を用いたのか、人類学者たちが映像という表現媒体を選んだ理由について考察しておきたい。まず挙げられるのは、映像による「再解釈の可能性」である。映像は言葉と違って「余分なもの」を映し出す。それは時には撮影者が意図するものであるが、そうでない場合もある。ゆえに映像は、その収録内容を後になってよりよい解釈へと修正することができる<sup>(10)</sup>。未知の世界での撮影には不測の事態がつきものである。著者が辺境の地で撮影を行う際にも、思った通りの映像が撮れるケースは皆無に等しかった。常に「当初予定していた6割が撮れれば御の字」と言い聞かせて現場に臨んでいた。それは逆に考えれば「思った以上のことが起きるのも現場」であり、「思わぬ成果」が期待できるということである。撮影者が意図しない映像やインタビューの返答、表情が撮れるのも不測のおもしろさなのである。その時は気がつかなかった事象が撮れている場合もあり、編集の際に歓喜することも多々あった。また数年後にその映像を見直して、新たな発見に驚くこともある。映像にはそういった「魔術」のような側面がある。映像を人類学の記述に用いる利点はもう1つ挙げられる。人類学に関わる者以外の人々からの注目を集めやすいということである。クリフォード・ギアツ *Clifford Geertz* は「ある民族の文化を理解することは、彼らの特殊性を希薄にしてしまうことなくその通常性を明らかにすることである」と述べているが、映像はその「通常性」を獲得する有効な手段となり得る<sup>(10)</sup>。「時間」と「空間」、そして偏見や常識、知識といった「情報」、映像はそれら3つを超越し、他民族の文化や社会に入り込んでゆく。それは破壊的ではあるが、同時に効果的でもある。映像を利用した人類学者たちはそんな映像の特性を認識していたのである。

西欧社会において人類学の記録に映像が活用された理由の検証は、一旦ここで留めておく。「人類学と映像の親和性」については後に詳しく法沢民俗学の考察の際に吟味してゆくことにして、史観的な視座からの検証を進めたい。ここで解決しなければならないのは、なぜ西欧社会において映像人類学が発展していったのかという点である。これについては当時の時代背景を併せて考慮する必要がある。映画などの映像メディアが登場した19世紀は、西欧列国が帝国主義による世界支配や植民地政策を行っている真っ只中であつた。西欧人たちが自国の植民地で出会った「異民族」や「異文化」を彼らなりの視点と方法で解釈するためには、映像の「大衆からの注目を集めやすい」という特性はプロパガンダ的に有効だった。人類学は「植民地主義の申し子」や「植民地主義の産物」と称せられることが多いが、ジェラルド・ルクレール *Gerard Leclerc* は「植民地主義のイデオロギーと人類学の潜在的イデオロギーの間には一定の関連が存在したことはほとんど疑いの余地がない<sup>(11)</sup>」と認めながらも、「人類学は植民地主義と一定の距離を保ち、それに反対衝撃を与えることによって植民地化イデオロギーの相対的変容をもたらした<sup>(12)</sup>」と指摘している。映像メディアがこのように脱植民地化に影響したことは間違いない。映像という手段を手に入れた人類学は植民地化を推し進める上での「資料」としての機能を確立しながら、一方で資源探査を含む探検や未知なる世界への冒険の「立会人」としての役割を果たしてゆく。そして急激な植民地化によって失われゆく民族の風習や変容する生活文化を伝えることで大衆からの支持を得て、前述したように1930年頃には自立した地位を獲得したのである<sup>(13)</sup>。

日本においては1904年に日露戦争の戦場に映画の記録班が派遣されフィルムが撮影されたことを皮切りに、映像メディアが軍事上の重要な情報媒体となってゆく。人類学系の研究者による日本周辺地域の民族調査の実施においても、映像は記録を留める道具として大いに利用された<sup>(14)</sup>。日本の人類学は西欧における人類学ほど積極的に植民地主義に参与しなかった。だが、国家政策に何ら

かの関わりを持ち、多くの人類学者はその陰で育った。1893年の第1回台湾調査のフィールドワークに日本で初めてカメラを導入した鳥居龍蔵もその一人であった<sup>(15)(16)</sup>。その後を表れた渋沢敬三は当初から映像を活用した記録を積極的に行い、日本における映像人類学の礎を築いた人物のひとつである。その発露はどこにあったのか。渋沢が活動を始めた1920年代はヨーロッパ列強による植民地統治が確立し、人々の関心が植民地の風俗習慣に向いてきた時期であった。こうした風潮の中、人類学者が撮影する民族誌映像は博物館や博覧会での展示だけでなく、映画という公共の場における発表形態によって大きく社会に影響を与えていた<sup>(17)</sup>。1922年にはロバート・ジョセフ・フラハティ *Robert Joseph Flaherty* によって、カナダのイヌイットの生活を描いた『極北のナヌーク *Nanook of the North*』のような映画も生まれた。日本においても1925年に北海道帝国大学の動物学者、八田三郎がアイヌの生活様式や道具、器などの使用方法を記録しておく必要性を感じて35ミリフィルムによる記録映画『白老コタンのアイヌの生活』を製作している<sup>(18)</sup>。当時、第一銀行の社員としてイギリスに赴任し、さかんに各地の博物館や映画館を訪れていた渋沢も、当時の流行から文化人類学的な啓蒙を受けたに違いない<sup>(19)</sup>。しかし、渋沢の学問への志向について注目されるべき点はその幼少期にある。渋沢史料館館長の井上潤は、渋沢の観察眼の原点は東京・深川の生家にあった「潮入りの池」であると述べている<sup>(20)</sup>。潮入りの池は東京内湾に繋がっていたため潮の干満があり、多種多様な魚や小動物が生息していた。渋沢は幼年期からその傍らにしゃがみこんで池を観察していた。渋沢にとってそこはまさしく自邸内の水族館であった。11歳の時、渋沢は友人たちと組織した「腕白倶楽部」の同人誌に『動物アカクマアリ』という詳細な図解入りの解説原稿を寄せている<sup>(21)</sup>。最初は動物の動きや生態を目に焼きつけているだけだった少年が、その情報を記録する手段として図示や画像の有効性に気づいていった。幼少期に育まれた未知なるものへの「好奇心」や物事をより突き詰めたいという「探求心」が、モノの姿を視覚でとらえ映像で効果的に表現するという渋沢の研究スタイルを築いていったのである。

1925年にイギリスから帰国した渋沢は、多忙な仕事の合間を縫ってフィールドワークを始める。この時の手法が、カメラによるフィルム撮影を伴うものだった。特に1931年から1937年にかけての7年間で、現地の風景や習俗、文化を映像として記録する21回もの調査旅行を行っている[表1]。このペースがいかに大変であるかは、実際にフィールドワークを行いながらテレビ・ドキュメンタリーを制作していた著者にはよく理解できる。調査に必要な時間は、足りないことはあっても余ることはない。参与観察のための準備、機材の準備や下調べ、何かあったときのリスクヘッジやスタッフ集め、現地での宿泊施設や食事、交通手段や案内人の手配など事前にやるべきことはたくさんある。帰ってきてからやらなければならないことも多い。資料の整理、撮ってきた映像の編集、映像の吟味・考察、保管作業、旅費の精算や各所への礼状や挨拶など多岐にわたっている。渋沢のフィールドワーク先を見てみると、当時「日本の僻地」と言われていたような場所が多い。そういった所でないと民俗学の対象にならないのだが、得てしてそういった場所は現地に辿り着くまでに時間がかかる。快適な宿が整っていることも少ない。不自由な滞在を強いられながら、フィールドワーカーたちは調査に神経を注ぐのである。そんな辺境への旅を年に3回のペースで行っていたのであるから、当時の渋沢はかなり多忙を極めたと想像される。渋沢の撮影調査は、1937年の三重県志摩崎島半島・英虞湾を最後に以降行われていない。これは社会における戦時体制が強化されてゆき調査が困難になってきたことが理由として推察される。2か月後の同年7月には大陸で盧溝橋事件が勃発し、日本は戦争へと突入してゆく。そんな状況下でフィルムが手に入らなくなってきたという物理的な理由もあっただろう。渋沢本人が経済人として多忙を極めてゆく時期にも重なって



いる。渋沢は1942年に日本銀行副総裁に就任し、その2年後の1944年には総裁に昇進した<sup>(22)</sup>。戦況が激化する中での調査旅行は、体面的にもよくないと判断したのかもしれない。

表1 渋沢敬三調査の旅とアチックフィルム

No.	訪問、撮影年月	場所	フィルムタイトル(存在しない場合は×)	注
1	1926.4-1926.5	台湾、沖縄	×	
2	1927.11	東京三ヶ島村、埼玉県堀之内	×	
3	1928.1	愛知県(三河)上黒川、三河稲橋ほか	×	
4	1929.1	愛知県(三河)設楽郡	×	
5	1930.1	愛知県(三河)設楽郡	花祭	
6	1930.4	東京三田綱町自邸	花祭	
7	1931.6	山形県飛鳥、青森県津軽十三・龍飛岬	飛鳥と津軽半島	
8	1931.9	長野県伊那街道	昔時の運輸制度 伊那街道の中馬	
9	1933.1	愛知県(三河)設楽郡、長野県下伊那地域、静岡県浜松北部地域	三河地方旅行	
10	1933.5	山形県米沢・手ノ子・小国町・栃倉、新潟県朝日連峰・奥三面	越後三面行	
11	1933.8	岩手県雫石村	田中喜多美氏薫製作	
12	1933.9	山形県温海温泉、秋田県角館・仙岩峠、岩手県橋場・沢内	田澤 仙岩峠 澤内	
13	1934.1	愛知県(三河)設楽郡	花祭 三河北設楽郡にて	
14	1934.5	鹿児島県十島村	十嶋鴻爪	
15	1934.5	島根県隠岐島	隠岐之島 景観	
16	1934.9-1934.10	秋田県男鹿半島・能代・藤琴、岩手県浅沢村石神、青森県八戸	男鹿、能代、藤琴、石神、八戸	
17	1934.11	東京三田綱町自邸	イタヤ細工 製作者 渡部小勝君	
18	1935.2	新潟県桑取谷	桑取谷	
19	1935.2	新潟県谷浜	谷浜	
20	1935.4	新潟県古志郡竹沢村	古志郡竹沢村角突	
21	1935.4-1935.5	大連、満洲	満洲	
22	1936.1及び1936.6	新潟県直江津、富山県中新川郡白萩村	直江津片田家行事・白萩村アワラ田植	
23	1936.4	台湾	台湾 I・II	渋沢不在
24	1936.8	朝鮮多島海の島々(蔚山、達里ほか)	多島海探訪記	
25	1937.3-1937.4	台湾南部山岳地帯	台湾高雄州潮州郡下パイワン族の探訪記録	渋沢不在
26	1937.5	岡山県児島湾八浜、備讃瀬戸の島々	塩飽	
27	1937.5	三重県志摩崎島半島・英虞湾	志摩崎島	
28	不明		木椀の材料採取	

※日本常民文化研究所「映像資料リスト」及び高城玲「アチックフィルム・写真と現地上映会」中の表1を参考に著者が作成

以上のような時代背景の中で渋沢を中心とするアチックミュージアムの同人によって調査の折に撮影された「アチックフィルム」は、戦後に何度か複製が制作された。しかし、それらは長い歴史の動乱の中で拡散してしまっていた。近年、神奈川大学の日本常民文化研究所によって収集され、原版は1995年に複製コピーされたデジタルテープによるマスターコピーと共に保管されている。そして現在、アーカイブ化を経て整理研究が進められている。フィルムは作品数としては24あり、すべて音声がない無声の映像である。全作品中10作品にはタイトルや地図、字幕などの注釈が加えられているため、フィルムの段階でつなぎ合わせて編集されていたと推測される<sup>(23)</sup>。作品は主に渋沢が使用していたコダックの16ミリムービーカメラで撮影された映像で構成されているが、中にはアチック同人の宮本馨太郎が撮影した9.5ミリカメラのパテベビーのものも混在していることが指摘されている<sup>(24)(25)</sup>。宮本の映像には恐らく渋沢の意向が大きく影響し、同じ場所に居合わせた場合には、互いが撮った映像が補完的な役割を果たしていたと考えられる<sup>(26)</sup>。

## 2. 渋沢が着目したマテリアルカルチャー

渋沢もしくは渋沢の指揮の下に撮影されていたアチックフィルムは、その土地の人々の様子や生活習慣はもちろんのこと、身に着けている服飾や持ち物、使っている民具や生活の中に根づいている用具などを丹念に撮影しているのが特徴である。渋沢はそれらの映像を通して何を描き出そうとしたのだろうか。そして何を訴えようとしたのか。これらの答えは日本民俗学の確立に大きく貢献した柳田國男との比較によって見えてくる。渋沢は柳田から学問的な影響を大きく受け、21歳も年上の柳田の研究を経済的に支援し続けた<sup>(27)</sup>。だが、両者の民俗学に対する考え方の違いは大きかった。民俗学は元来、「民間伝承」を資料として研究する学問であり、柳田はこの民間伝承を以下の3つに分類している。

1. 生活技術誌：生活外形、目の採集、旅人の採集によるもの
2. 生活解説：目と耳との採集、寄寓者の採集によるもの
3. 生活意識：心の採集、同郷人の採集によるもの

この分類によって柳田は、旅人やその地に滞在した者が目や耳を使って集めた民間伝承だけでは不十分であり、心意現象を把握した同郷人による採集が重要でその条件が満たされていない場合には研究資料としては成立しないと説いた<sup>(28)</sup>。柳田は渋沢の民具研究に否定的で、かなり早い段階から「疑似厳密性」があるとして懐疑的にみていた<sup>(29)</sup>。対して渋沢は、外形の物質文化の中にも生活意識が含まれているととらえ、マテリアルカルチャーの研究によって人々の心意現象を見定めようとした。渋沢は自著『祭魚洞雑録』の中で以下のように述べている。

自分等が特殊の敬愛と同情とを持つ民俗学に、今まで生物学的とでも云いたいような実証的研究法があまり用いられておらぬことをいささか不満に思っていた。(中略)方言の方法にしても、仮名だけで集めた時の危険は想像以上で、ピクといい、カゴといい、フゴといい、モッコといい、その何れにしても実物なしでは本体の解らぬものが多い。(中略)ここに実物が物を云う所もあるのである。そしてこれは民俗学の一部門として極めて重要なことと思う<sup>(30)</sup>。

そして更に、民具などのモノだけでは心意現象は紐解けないと説いた柳田に異を唱えるかのように、渋沢は「我がアチックは全体の一部として見て、これを作った人々の心を見つめようとする。即ちアチックの標本は、我々先祖の心を如実に示現している点に奇しき統一があり、そこに特殊の美を偲ぶことができる<sup>(31)</sup>」と主張している。このことからわかるのは、渋沢は決して物質主義的な考えに立っていたのではなかったということである。マテリアルカルチャー論からのアプローチ方法を採用していたが、内面的な心意現象を蔑ろにしているわけではないのである。渋沢は目に映ずるモノから庶民の心



図1 コノマ村の門

を感じ取ろうとした。この渋沢の考え方の正当性を実証する例を、著者の経験知から挙げておきたい。著者は、1993年にインドのナガランドNagaland州でおよそ2か月間にわたるフィールドワークを行い、その際に記録に収めた映像をドキュメンタリーとして発表した<sup>(32)</sup>。ナガランドは当時、インド国からの特別許可がなければ外国人は立ち入ることができないエリアであった。現地では民族独立運動が長年続いており、それが激化していたからである。東側はミャンマーに接し、インドに属しながらその人種はモンゴロイドである。35以上の部族、350万人ほどが日本の本州の半分くらいの広さの土地に独自の民俗習慣を守りながら暮らしている。私が訪れたコノマKhonomaはアンガミAngamiの民の村であった。村の入り口には巨大で頑丈な門がそびえ立ち、これを閉めてしまうと村は要塞化する。部族同士の争いが激しかった頃の名残である。門には極彩色で人間の姿や顔が刻まれている。この顔は首狩りの風習があった頃の敵の首を表している[図1]。家々の入り口には、キケkikeと呼ばれる牛の角を模った巨大な飾り物が掲げられている。キケは大きければ大きいほどよいとされ、日本の「うだつ」に似た意味合いがある。人々は黒色の布に子安貝を円文形に縫いつけた立派なショールを纏っている。これもかつては首狩りをした者だけが身につけることができた。首には自分が狩った敵の頭蓋骨を模した真鍮の首飾りをかけている[図2]。ナガランドではイギリス人宣教師によるキリスト教の布教活動が盛んに行われ1980年代には首狩りの風習は途絶えたとされるが、未だに精霊信仰に根づいた考え方が残っている。人間の頭蓋骨は農耕や狩猟の豊作、部族の繁栄をもたらす生命力と考えられている。そのため首狩りは大地を豊かにしてくれると信じられ、強い戦士の首を狩るとその魂が狩った者に宿るとされてきた。著者はこれらの装飾品や衣装などのモノを現地の人々を理解する大切な事象ととらえ、訪れた際に最初にこれらの民具や家の外観などの生活外形から撮影することに決めていた。一番の理由は現地の人とのコミュニケーションを重要視することに起因している。著者自らの長年のフィールド経験によって以下の3つのことを知っていたからである。

1. 言葉によるコミュニケーションが難しい場合、まず形から理解してゆくことが有効である。途上国や未開の地の生活用具には民族の歴史が刻み込まれていることが多いからである。
2. そこに住む人々は外界から来た人間に対して警戒心が強い。しかし、自分たちが是認し常用しているモノや生活様式を理解しようとすることは、好感をもって受け止めてくれる。
3. 好感を持つようになってくれて初めて外来者を受け入れ、心を開いて本音を話すようになる。



図2 ナガランドの人の首を模した首飾り

モノは現地の社会における人と人とを繋ぐコミュニケーションツールであり、同時にフィールドワーカーと現地の人とのコミュニケーションツールでもある。柳田が言う「生活意識」という心意現象に至るまでには、こういった意思疎通を取りながら「生活外形」からのアプローチや「生活解説」による理解というプロセスを経てゆくことが必要なのである。それこそまさしく渋沢が述べる「作った人々の心を見つめる」ことである。ナガランドの場合には「首狩り」を野蛮な行為とステレオタイプに見るのではなく、彼らの愛用するモノ(民具や衣服、装飾品など)を通して彼らのアニミズムという精神世界を理解す

ることが彼らの心を理解することに近づく。そうすれば彼らはインフォーマントを担ってくれるようになり、結果的にそれがフィールドワークを全うすることに繋がってゆくのである。渋沢の研究はマテリアルカルチャー論を組み入れたことで、柳田の民俗学を意識しつつも柳田が軽視した事象を採択し、日本民俗学の外延を拡張した。渋沢の民俗学は民俗学に基づきながらも民俗学に留まらず、異民族を扱う研究分野である「民族学」をも包括する多様性とスケールの大きさを持ち合わせるようになったのである。

マテリアルカルチャーに着目した例を海外に求めてみると、アルフレッド・ジェル *Alfred Gell* の理論が思い浮かぶ。ジェルの研究は芸術人類学の領域ととらえられることが多いが、その分析は芸術作品に限定されるものではない。代表的なものはパプアニューギニアのトロブリアンド諸島 *Trobriand Islands* で行われている「クラ *kula*」交易がある。クラは貝の首飾りと腕輪を交換品として取引するシステムである。ジェルは、この交易に使われる遠洋航海カヌーの舳先板と防波板に施された装飾が対面する相手の心を誘惑し防御を崩すことで、相手が意図していた以上にその心を気前よくすると分析した<sup>(33)</sup>。モノを何らかの意味を運ぶ容器としてとらえる認識論からの脱却を図り、モノを人間の行為を媒介する社会的な役割を果たす「エージェント *agent*」とみなした<sup>(34)</sup>。つまりモノは単に受動的な存在ではなく、自分たちを作り、自分たちの社会をかくあらしめている存在であると唱えたのである。これを先程のナガランドの例に置き換えてみる。頭蓋骨を模した真鍮の首飾りをしている人に出会ったら道行く人は恐れるような表情を浮かべて道端に寄り、道を譲るような仕草をする。これはまさしくジェルが述べるように、首飾りはエージェントの役割をして「ペーシエント *patient*」である相手の人間に潜在的に畏敬の念を与えるという効果をもたらしている。そしてその様子からフィールドワーカーである私たちは首飾りにまつわる民俗的なしきたりや民族的な伝統、首飾りから受ける現地の人々の感情などを知ることができるのである。ダニエル・ミラー *Daniel Miller* は、このジェル概念を更に進めた考察を行い、行動としての消費や物質文化を通して社会関係がいかんにして作り出されるかを検討した。一例として、モノを残したり処分したりすることで人はいかにして愛情や気遣いの関係を築いていくか、いかんにして別れや喪失を乗り越えようとするか、といったテーマでマテリアルカルチャーの研究に民族誌的アプローチを導入した<sup>(35)</sup>。その結果、モノは人間の経験の中ではあまりにも中心的な役割を果たしているため物質文化への理解なくしては人間を理解することはできないと結論づけている。モノは主体(人間)との関りの中でその範囲を超え、主体を変え得る。モノは単に無機的な塊ではない。それ自体が機能し、自発的に



意味を發し、他者に作用し、また他者から作用され、自らを表現し、そのことによって人間の心を動かす。モノは特定の行為を遂行するための手段であると同時に、社会的環境の中で人間を投影し、人間を表現するのである。ナガランドのキケはその存在自体がその土地や民族のアイデンティティーやプライドの表れであり、もしそれを喪失してしまえば人々の文化や習慣のみならず社会全体の崩壊に繋がるかもしれないほどの意味を持ったモノなのである。著者は先行研究において、これら民俗的及び民族的な有形物や無形的な習慣などが急激な開発理念や環境変化によって崩壊する危険性について警鐘を鳴らしている<sup>(36)</sup>。これらの危機を避けるためには、まさにジェルやミラーが述べるマテリアルカルチャー的な発想が肝要だと改めて指摘しておきたい。ミラーが上記のような研究を確立したのは1987年の自著『*Material Culture and Mass Consumption* 物質文化と大量消費』においてであり、ジェルのトロブリアンドでの研究は1992年である。しかし、渋沢がこの物質文化の概念に着目し、モノを収集、研究することで人々の生活や社会を紐解く試みを始めたのは、それから遡ること半世紀以上も前の1926年であった。

### 3. 渋沢民俗学におけるフィールドワークの意義

渋沢はモノを通して人々の心に近づくことで民俗学を極めようとした。「再解釈の可能性」を含む映像の有効性についても熟知していたのであろう。渋沢のそのような能力や素質は、単にアカデミックな思考から来るものだったのだろうか。当節ではフィルムカメラを伴った渋沢のフィールドワークの足跡を俯瞰し、時にミクロ的に焦点を当てながら、その再構成を試みることで渋沢民俗学を大きく発展させることになった渋沢の「もう1つの視点」に迫ってゆく。着目したのは、渋沢がロンドン赴任から帰国した翌年の1926年4月18日から5月2日まで行った台湾訪問である[表1]。これは台湾で開かれた米穀大会というイベントへの出席のためであったが<sup>(37)</sup>、渋沢が自覚的に行った初めての現地調査の旅と考えてよい。帰国した渋沢は第一銀行の取締役として多忙な職務の合間に旅の記録を「南島見聞録」としてまとめ、最初の著書『祭魚洞雑録』に収めているからである。「南島見聞録」を見てみると、渋沢にとって台湾訪問が印象深いものであり、後の民俗学研究の方向性を決定するきっかけとなったことがわかる。渋沢の意識転換を招いた重要な分岐点と考え、以下に整理しておきたい。この中で渋沢は台湾統治の植民地主義に対して「疑いと憂いを持たざるを得ない<sup>(38)</sup>」と痛烈な批判をしている。「台湾の小学生に朝鮮征伐を事細かに教え込んだり、オドオドする児童にテニヲハをつめ込んだりすることによって、台湾人が日本人に脱化したり、或いは彼等の民族的自覚を消失し得るとでも思っているのか<sup>(38)</sup>」と厳しく述べ、治者や民間有力者が、ただ単に治めるとか資産の開発を考えるのではなく、日本人と台湾人とが強い関りを持ってゆくべきだと説いている。この文章からは、渋沢が民俗学から民族学へと脱却し始めているさまが読み取れる。また台湾の数々の民俗的なモノに触れ、「こういったような民間風俗の蒐集は、今のうちから始めないといくら保守的な台湾でもじきに滅びてしまう<sup>(39)</sup>」とマテリアルカルチャー研究の喫緊を訴えている。「日本の学者がこの方面から台湾に対して特殊の眼をつけられんことを切望する<sup>(40)</sup>」という自らを鼓舞するような表現も見えることから、この訪問で渋沢が台湾及び植民地諸国を研究フィールドとする決意を固めたことが推測される。事実、渋沢はこの9年後に満州・大連を、その翌年には続けて朝鮮を訪れている。台湾に関しては自ら赴くことができなかったが、2度もアチック同人たちを大規模な調査隊として現地へ送り込んでいる[表1]。渋沢にとって台湾訪問はアチックフィルムによる映像人類学としてのフィールドワークの第一歩であると同時に、次に続いてゆ

く調査のための第一義的な「ロケハン(ロケーションハンティングの略の和製英語だが、正式には *location scouting* である) = 下見」だったのである。

渋沢が映像人類学における卓越したフィールドワーカーとして、また優秀なクリエイターとして評価される所以は、慎重なまでに徹底した「下見主義」である。現愛知県北設楽郡に今も継承されている神事芸能「花祭」に関しては、撮影をするまでに2度もロケハンと思える現地調査を行っている[表1]。1931年に長野伊那街道でフィールドワークを行った2年後に現地を再訪していることから、1度目と2度目の調査が互いに補完的な役割を担っていたと考えられる。岩手県においては1933年に雫石、同年に橋場・沢内を訪れているが、橋場と沢内は雫石を拠点にして南北に



図3 岩手県現場地図 \* 著者が作成

向かった場所にある[図3]。新潟では1933年に朝日連峰から越後の奥三面へ、1935年には古志郡竹沢村を訪れている。どちらも作品のタイトルになっていることから撮影の重要な目的地であったと思われるが、現在は存在しない村落である。奥三面(旧三面村)は古くから「マタギの里」と呼ばれ、1985(昭和60)年に奥三面ダム建設による移転のため消滅した<sup>(41)</sup>。アチックフィルム「越後三面行」の映像を確認してみると、渋沢は米沢・手ノ子・小国町・栃倉を経由して現地に向かっていることがわかる。これは目的地が山形県に近い場所にあったためだと考えられ[図4]、旅程の途中で現地の情報を得ながらアプローチしていったと推測される。一方、古志郡竹沢村は2度の町村合併を経て2005年に長岡市に編入合併され、山古志村となって消滅した。国の重要無形民俗文化財にも指定されている「牛の角突き」が今も本州で唯一伝承されている場所である<sup>(42)</sup>。その地を訪れる2か月前に渋沢は桑取谷と谷浜を訪れているが、このルート上にあるのが1年後に訪れることになる直江津である[図5]。以上の事実からわかるように、渋沢は時間をおいて同じ方面への調査を繰り返している。これは一度目の調査を踏まえて綿密に次の調査の計画を立てていたことを裏づけるもの



図4 新潟・山形県現場地図 \* 著者が作成

のであり、最初の調査で見聞したものを確認、補足、調査するための役目が次の調査にあったことを表している。また本格調査の準備のために、事前に計算して同方面もしくは同エリアへのフィールドワークを予行演習的に行っていた可能性がある。つまり渋沢は当時の未発達な交通機関と限られた時間の中で精度の高い調査を行うために、前もって綿密にロケハンの予定を立てていた。その論拠を示したい。著者もこの手法を活用してフィールドワークを行っていたのである。チベット文化圏の取材を行う際、当時は今のようにインターネットがなく情報を得る機会も限られていたため取材先で次に訪れる候補地についてのリサーチや聞き取りを行っていた。前述したナガランド調査の折にも、次に訪れたいと考えていた隣のアルナーチャル・プラデーシュ *Arunachal Pradesh* 州の情報を集めてい

た。ナガランドとアルナーチャル・プラデーシュは民族の属性が近く、現地から帰ってきてしまうと収集しづらい「生きた情報」が手に入るからである。それはまさしく次の現場の事前調査に他ならなかった。渋沢の時代の日本の僻地の状況も同じようなものであっただろう。アクセスしにくい地域へは何度も足を運びづらかったに違いない。そのため目星をつけた次に訪れる予定もしくは訪れたい場所についてのリサーチを現地で行っていたと考えてよい。人類学におけるフィールドワークの一般的方法論の確立は、第二次世界大戦以降だとされている。トーマス・ライズ・



図5 新潟県現場地図 \* 著者が作成

ウィリアムズ *Thomas Rhys Williams* の『*Field Methods in the Study of Culture* 文化の研究におけるフィールドメソッド』(1967年)において、文献調査とフィールドワークは交互に繰り返され、いわゆる「下見」にあたる予備的フィールドワークが本格調査の準備をする上で役に立つと述べられているが<sup>(43)</sup>、それより以前に渋沢はその手法を見出していたことになる。

次に渋沢がフィールドワークとして訪れている場所を詳細に分析してみると、ある共通点に気がつく。海沿いの場所、沿岸部が多いということである。三河地方、津軽半島、男鹿半島、浜松、八戸、新潟県桑取谷・谷浜・直江津、岡山県児島湾、三重県前島半島・英虞湾などだが、島嶼も多い。沖縄にはじまり、飛鳥、鹿児島県十島村、隠岐島、備讃瀬戸の島々などである。これらの場所の選定に関しては、渋沢の意向が働いていたと考えられる。当時のアチック同人であった宮本馨太郎は「内浦漁民史料に見える民具の研究」を渋沢から要望されたと日記の中で述べ、同じく同人の桜田勝徳も「漁船について調べてみてはどうか」と渋沢から提案を受けたことを記している<sup>(44)</sup>。また渋沢はアチックミュージアムに漁業史(水産史)研究室を設け、研究者を集めて漁業史研究を推進するほどの熱の入れようだった<sup>(45)</sup>。晩年には、日本全国に分布する魚の科目、分布、特徴、日本各地における呼称をまとめた『日本魚名集覧』や釣漁技術の発達をその漁法や釣具、漁具、餌などの側面からまとめた『日本釣魚技術史小考』を執筆していることから、漁業や水産、海産に対する興味の深さが伺える。祖父・栄一が亡くなった後の心労から患った糖尿病の療養のために、渋沢は三津浜(現在の静岡県加茂郡中伊豆町)に隣接する長浜村に逗留している。その際に発見した古文書を解読した『豆州内浦漁民資料』を1937年に上梓した際の序文では、学生時代に静岡へ毎夏行っていたためその辺りの海や海村の様子には昔から何となく特別な親しみを持っていたことや自分の釣道楽は海に偏っていて自然と海の漁業につき見聞するところが多くなっていたことなど、海への思いを述べている<sup>(46)</sup>。

以上、アチックフィルム自体の「作品」という枠組みを解体してフィールドワークの場所を繋ぐ再構成を試みたことで、新たな事実が見えてきた。だが、渋沢は幼い頃に親しんだ生物学への興味や個人的な憧れだけの理由から「海」をフィールドワークの場所として選んだのだろうか。むしろそうではない。すでに財界人としても多忙を極めていた渋沢がわざわざ自らフィールドワークに出かけていたことには何らかの意味がある。これまでの研究では、渋沢の民俗学への情熱は自らの境遇、すなわち本当は生物学者になりたかったところを渋沢家の跡継ぎになってしまったためにその

志を捨て祖父の望む経済界に進まざるを得なかったことへの反動から来ているといったような解釈がなされてきた。祖父・栄一から引き継いだ渋沢財閥の重圧から逃れるために民俗学に打ち込んだと考えられたのである。そのため、先行研究における渋沢民俗学の評価は「民俗学からの視点」による実績に終始し、「もう1つの視点」からの考察は見落とされてきた。いよいよ次節では渋沢民俗学において重要な指針となった「もう1つの視点」に光を当て、それが渋沢のフィールドワークにどのような影響を与えたのかを紐解いてゆく。

#### 4. 渋沢民俗学を方向づけた「もう1つの視点」の存在

渋沢民俗学における「民俗学からの視点」とは異なる「もう1つの視点」とは、「社会経済史からの視点」であると推察される。社会経済史とは、人間の経済生活を社会現象との関連の中で捉えようとする考え方である。経済生活の発展のためには資本主義経済が生み出す社会問題の解決が必要だとしている。渋沢がこの社会経済史を重要視していたことは、自著『祭魚洞雑録』の「アチックの成長」の中で花祭のことに触れ「自分に物足らぬ感じが今なおしているのは、この行事に対する社会経済史的な裏づけのなかったことである」と述べていることからわかる<sup>(47)</sup>。この渋沢の視点に関してはこれまで唯一、原田健一が取り上げている<sup>(48)</sup>。しかし、原田は日本実業史博物館設立と渋沢の著書における社会経済史的な要素に触れたのみであり、これを指摘した川越仁恵も渋沢が収集した「足半<sup>あしなか</sup>」という草履を社会経済史的視点の例として断片的に挙げるに留まっている<sup>(49)</sup>。著者はこれを発展させ、渋沢民俗学の主たる特徴であるフィールドワークとマテリアルカルチャーにおける社会経済史的な視点について更なる吟味を行う。その前に、なぜ渋沢は「社会経済史からの視点」を得ることができたのかということについて明示しておきたい。その起因は2つある。1つ目は渋沢が先天的に、もしくは祖父・栄一から受け継いだということである。渋沢栄一は、人間の経済行為を利益追求のための行為としてだけでなく広く人と人との関係性を作り出してゆく社会的な活動としてとらえる「道徳経済合一」を唱えた。渋沢家の跡継ぎであった渋沢がその思想を栄一から教え込まれたであろうことは想像に難くない。2つ目は渋沢自身の経済人、財界人としての経験則である。栄一の「民の繁栄が国の繁栄に繋がる」という教えを推進したということもあっただろうが、渋沢は日々の実務の中から庶民が経済を支えるという過程が重要であることを観取していた。そして民俗学という学問において「庶民(人間)」という要素が抜け落ちていることにも気がついていて、人々の日常生活の中に受け継がれてきた文化は、形あるからこそ残してゆかなければならない。文化財として博物館や遺跡のような形で維持するためには金銭が必要となる。しかし、芸能を無形文化財や人間国宝として伝承してゆくためには人間という資源がまずは必要であり、伝承者がいなければ金銭による支援が不可欠となる。多くの学者を経済的支援によって育て、博物館の設立にも奔走した渋沢は、学問と人間関係をそのようにとらえていた。そして経済なくして学問は成り立たないと感じていた。民俗学を発展させるためには経済の原動力となる「形あるモノ」が必要なことを渋沢は知っていた。だからこそフィールド調査を通して庶民の生活や暮らし、そしてそれらを形成するモノを追い求めたのである。渋沢にとっての研究対象は庶民の衣食住を支えるすべてのマテリアルなものであった。それらの様々なモノは産業の発展が伴えば工場生産された商品に変えられ、経済というシステムに組み込まれて社会全体に循環することもある。だが、渋沢はそういった物理的な側面のみならずモノが生み出す精神的な作用について着目していた。モノを消費的なものとしてみるだけでなく、新たな技術や創意工夫を含んだ人と人とを媒介するコミュニ



ケーションのツールとしてとらえていたのである。変化によって消滅し忘れ去られてゆくモノに対して深い愛惜の念を持つと同時に、新たなものを生み出そうとして現れるモノの微細な差違に眼をこらそうとした。こうしたスタンスは、研究から生み出されたというより実業家として社会にかかわってきた経験から培われた姿勢とってよいだろう<sup>(50)</sup>。

では、渋沢がその社会経済史的視点からフィールドワークにおいて極めようとしたマテリアルカルチャーとは具体的に何だったのだろうか。その答えは、渋沢がフィールドワークの場所として沿岸地方や島々にこだわった理由にある。渋沢は1932年に塩についての質問票を作成し、日本各地のみならず植民地にまで発送している。質問要項は塩の貯蔵方法と容器・名称、塩の取扱についての慣習など21項目で、回答数は当時植民地であった朝鮮からを含めて156に及んだ<sup>(51)</sup>。きっかけとなったのは、1年前の1931年に訪れた伊那街道への調査旅行であった。渋沢はその際、山の上の一軒家にも塩があることに気づき、それが中馬の輸送手段によってもたらされたことを知った。後に訪れた奥三面の折にも、「お婆さんが清い湧き水に薄汚い塩を入れてお浄めに用いるのを見て、塩の奥に海のあることを感じた」と塩について記している<sup>(52)</sup>。21回にも及ぶ7年間のフィールドワークは、質問票で各地から収集した報告を確認して回る作業だったのではないだろうか。渋沢は自著『祭魚洞襍考』で、人間の身体にとって生理的にどれほど塩が大切かを熱く説いた。そしてその様々な生産方法や貯蔵法、調理法などの消費面、運送や行商などによる流通方法などの配給面、民俗事象としての祝い事や浄め祓い、薬としての民間療法、防腐効果までを詳細に記している<sup>(53)</sup>。隠岐では神前に供えるために女性が海水を手桶に汲んで持ってゆく「潮汲み」に着目した。男鹿・石神・八戸においては塩釜跡の調査を行っている<sup>(54)</sup>。渋沢が訪れた新潟県谷浜・直江津は「義の塩」で有名な場所であった。桑取谷には「塩のまかない」という言葉が残っている。岡山県塩飽の地名の由来は島で行われていた製塩の様子を表した「藻塩焼く」から来ているという説もある。日本は海に囲まれているものの湿度が高く平地面積が少なく、海外のように塩田で時間をかけて塩を結晶させるという方法は採れない。そのため塩を取る様々な工夫をしてきた。日本では1905年に政府による塩の専売制度が導入されたが<sup>(55)</sup>、既に食塩需要を国内生産の塩だけで充足することは困難になっていた<sup>(56)</sup>。その供給は、植民地からの補填に依存する状態だったのである<sup>(57)</sup>。以上のことから、渋沢が沿岸部を主なフィールド場所として選んだ主な理由は「塩」に関する調査をするためであったと考えてもよいのではないだろうか。後に渋沢は「日本においては、海というか海水というものと、われわれの生活というものが案外つながっている」と述べ、この現象を「経済史的に一種のメルクマール」と称している<sup>(58)</sup>。三河にはじまり、沿岸部や島々を巡り、満州や大連、朝鮮や台湾などに至るフィールドワークは、日本列島とそれを取り巻く植民地を繋ぐ「塩」というマテリアルカルチャーを辿る壮大なる旅だったのである。

未知の場所に人類の未来に役立つ産物を探すこと。それはまさしく地理学における帝国主義的植民地調査に他ならない。渋沢のようないわゆる上流階級の者が日本の僻地や植民地において調査を行うということは、個人的でありながら一方で個人的ではない。人類学や民俗学の視察には常に「上から目線」の視角が存在するからである。調査そのものが、植民地の統治行政の施策のあり方だけでなく統治そのものの政治的妥当性に関与してしまうこともあっただろう。渋沢が1936年に現地調査を行った朝鮮半島・蔚山地方の達里村においても、それは例外ではなかった。達里村ではかつて製塩業が盛んだったが、塩田は1910年代には消滅し、渋沢が訪れた時にはすでにその習慣は廃れていた。渋沢の現地調査は実質的には塩にまつわるものであったと考えられる。しかし、当時の状況を鑑みた時、それが純粋に学術的な目的だけであったかという点については疑問が残る。蔚

山地方では朝鮮工業化政策が本格化していた。植民地化以前から日本人が移住・定着して基盤を整えていたため、日本-朝鮮-満州を繋ぐ日本の植民地統治体制下の拠点となっていた。蔚山は素朴な農村の一面を持ちながら、同時に日本帝国主義の大陸侵略政策における要所だったのである。日本の山口までの航路が新設され、工業港や工業都市として開発事業も推進されるなど、蔚山の自然的・産業的・戦略的立地の利点を最大限に取り入れた軍事構想が立てられていた。渋沢が1年前に訪れた満州も植民地として大きな意味を持っていた。1930年代は働き口を求めて朝鮮から日本に渡る農民や労働者が増大していた。日本政府は朝鮮人労働者の渡航過剰を食い止め、同時に満州支配を安定化させる目的で、日本と朝鮮の農民の満州への移住を組織的に推進しようとしていた<sup>(59)</sup>。そんな状況下において、民俗学的研究は帝国によって文明化されるべき野蛮な植民地の現状、そしてその統治が正当であることを世にアピールする道具でなければならなかった。そのためたとえ純粋かつ客観的な学術調査を追求したとしても、最終的な目標はコロニアリズムの合理的、効率的な執行に寄与することを求められた。しかし、渋沢は「南島見聞録」の中で、台湾統治の植民地主義に対して痛烈な批判を行い、統治者である日本人と植民地民の台湾人とが強い関りを持ってゆくべきだと主張した。これは単に勇氣ある行動というだけでなく、渋沢の政治思想がそれまでの「植民地主義の産物」的な人類学のものとは一線を画するものであったことを示していると言えるのではないだろうか。

## 5. 2つの視点から見えてきた渋沢民俗学の特徴

ここまで渋沢敬三が試みた民俗学のフィールドワークを2つの視点から検証してきた。1つ目は民俗学的な視点である。その結果、渋沢のマテリアルカルチャーの実践はモノの姿を映像に記録するといういわば日本における映像人類学の草創を成すものであったことが確認できた。2つ目は、本論で新しく明らかにした渋沢の社会経済史的な視点である。渋沢には天性とも言える経済史的なアプローチで問題を照射する能力が備わっていた。それは経済的には利潤を生まず産業化できないものであっても社会全体で見れば必要なものがあることを見抜く力であった。そしてその力は、経済界の要人としての類まれな経験によって更に研ぎ澄まされていった。これら2つの視点からの検証によって浮き彫りにされた渋沢民俗学の特徴は、以下の3つである。

1. 量的調査法と質的調査法の両方を活用したこと
2. あくまでも庶民を対象としたこと
3. マテリアルカルチャーにこだわったこと

これらの特徴は映像人類学上においてどんな意味を持つのだろうか。1つ目の「量的調査法」と「質的調査法」については、これまで両者の是非が論じられどちらかに偏った主張が多く見られてきた。渋沢はこれら両者の長短を理解した上でバランスよく組み合わせることでフィールドワークに役立てようとした。下見の際には現地での聞き取りによるサンプル調査、文献などによるデータ分析を行ったが、調査に先立つリサーチも怠らなかった。薩南十島調査に際しては、事前に様々なデータ収集を現地に依頼している<sup>(60)</sup>。塩に関するアンケート調査も量的調査法にあたる。そして量的調査法で得た仮説を確認、実証するために参与観察や長期滞在による質的調査法を行った。実証主義を主軸としていた渋沢にとっては、非実証的な「単なる量的調査」は意味がないもの

だったのである。この渋沢の思考は、映像撮影を記録の手段とする者にとって当然のことと言える。著者が途上国の辺境を初めて訪れる際には、必ず事前に専門家やその地域に詳しい研究者から情報やデータを得ていた。場所や地域によっては情報量が少なく信憑性に欠ける場合があったが、この量的調査には可視化されない心理的な役割があることもわかっていた。実際に撮影を行う際にはどうしても現場主義に陥りやすく、映像が主観的になってしまう。客観的なデータはこの映像の特性を緩和させてくれるのである。ギアツが「フィールドワーク自体が解釈的な行為である<sup>(61)</sup>」と説き、実松克義が「映像の記録は方法論的に量的調査法と質的調査法の両方を包括している<sup>(62)</sup>」と述べているのはその所以である。また奥野卓司は両者の限界を指摘し、情報社会に適応した新たな質的調査法の必要性を提示している<sup>(63)</sup>。つまり文字上の検証とは異なり、映像による記録検証の場合にはこれら2つの調査法の併用がふさわしい。逆の言い方をすれば、映像による検証が成立するためには2つの調査法が伴っていなければならない。そう考えると、量的調査法と質的調査法の両方を活用した渋沢が記録媒体として映像を選んだのは必然だったのである。

2つ目の「庶民に目を向けた」という特徴に関しては、ルーシュの「共有人類学」の観点から映像人類学的な意味について述べておきたい。映像人類学は対象者と向き合うことから始まる。前述の著者のフィールドワークの例のように、映像を記録する側と記録される側の信頼関係やコミュニケーションが構築されて初めて互いに有益な映像が撮影できる。そのためには現地の人々との映像の「共有」は不可欠である。共有された民族誌的な映像は両者の均衡の産物ではあるが、時に両者を非対称な関係へと導いてしまう場合がある<sup>(64)</sup>。ルーシュが述べるように、フィードバックによって撮影相手に自分自身の尊厳の証拠を与えることができ、自らの運命は自身の中にあると気づくきっかけになる点では有効である<sup>(65)</sup>。だが、同時にそれは撮影相手に「撮られる意識」を与えてしまうことにもなる。そのことが「意図的な」映像に繋がらないように注意する必要があるだろう。記録者にとって撮影した映像が自らを裁く装置になる可能性があることも忘れてはならない。裁こうとする者は映像を観る観客であるかもしれないし、もしかしたら映像を共有した現地の人々かもしれない。映像には常に「暴力性」が伴うこと、そして共有をすることで共有者を巻き込んでしまう危険性があることを自覚しなければならない。共有という行為が免罪符になるわけではないということも十分に理解しておく必要がある。「現地の人に見せたから大丈夫」といったような過信は禁物である。著者も撮影の際によく現地の有力者に請われて上映会を催したりすることがあったが、それはあくまでも撮影や現地調査を円滑に進めるための方法論の1つに過ぎないということを肝に銘じてきた。現地の人々の全員が私たち外来者の訪問や記録を歓迎しているとは限らない。映像を共有する場である上映会に出向いてくれた人々がすべて賛同者であるとは言い切れないのである。このように一般人、庶民を調査対象、記録対象にするということは記録者にとって「覚悟」を意味し、すべてにおいて気が抜けない作業である。それを渋沢はあの時代に、治者や優位者の立場からではなく敢行した。渋沢は「南島見聞録」の中で「生蕃の心境には自ら日本人と或る種の共通な意気を有するように考えられてならぬ<sup>(66)</sup>」と台湾先住民への親近感を熱く記した。これに対して、渋沢の民族学的思考から距離を置こうとしていた柳田國男は「私たちの同胞にたいして抱いている熱意というものを、すぐに転用してちがった人種に持って行くということは困難なんです。われわれはまだ彼の靈魂には触れていない」と批判を加えた<sup>(67)</sup>。しかし、モノや文化そして社会経済史的な資源を共有するコモンズ思想を持っていた渋沢にとって、フィールドワークで訪れた場所の市井の人々と心を通わせながら映像を記録するという作業は魅力的であったに違いない。前述したような留意点があるにせよ、それが映像人類学の真骨頂である。そしてその行為は撮影に携わった当事者

を成長させる。映像人類学にはそういった「人間開発」の作用があるのである。

3つ目のマテリアルカルチャー論に関しては、その限界について言及しておかなければならない。

小島摩文は「自給自足的な生活をしているわけではない日本の物質文化研究に適用すれば、必然的に齟齬がでてくる<sup>(68)</sup>」と渋沢のマテリアルカルチャー論に注意を投げかけている。これはもっともなことである。当然、辺境の地や日本と全く異なった文化を持つ人々のモノを都会や先進的な生活を送る人々に適用しようとするならば無理がある。しかし、マテリアルカルチャー論の本質は現地のモノをそのまま異文化に適応させることではない。渋沢は「作った人々の心を見つめる」ために目に映ずるモノに着目した。言うなれば、モノが形成する物質文化に興味があったというよりモノを作り出す人間の心に興味があったのである。もちろんモノから派生する社会経済史的な効果は期待しただろう。だが、主目的はそれではない。渋沢が目指したのはマテリアルカルチャーが社会に及ぼす影響を看破することであった。モノは特定の行為を遂行するための手段であると同時に、それぞれの社会的環境の中で人間を投影し、人間を表現する。その考え方に基づけば、モノの存在は「自給自足的な生活をしているか、否か」などの社会環境に左右されるものではないのである。その一方で、モノには物理的な限界があることも理解していなければならない。モノの形や表象だけにとらわれすぎて、本質を見誤ったり見逃したりすることは避けなければならない。特に映像で物質を取録する場合にはいわゆる「映像映え」するモノを選択してしまう傾向があるため、記録者による「本当にそのモノが重要なのか」「モノをとらえる視点が間違っていないか」などの自己への確認作業が必要になる。これを著者のナガランドの例に当てはめてみる。インパクトだけを重視すると地元の人が身に着けている首狩りのネックレスを映像に収めることになる。しかし、「そのネックレスは誰のために、また何のために存在するモノなのか」ということを考え、その点を十分に理解した上で撮影に臨むように心がけた。このようにマテリアルカルチャーを映像人類学に応用する場面においては、外見だけでなくその本質を見抜く記録者の力量が問われるのである。

## 結

本論では映像人類学の成り立ちとその発展を歴史的な側面から見つめ直し、渋沢民俗学の意義、日本における映像人類学の草創期における位置づけ、そして渋沢が映像を通して訴えたかったものは何だったのかを検証してきた。それを踏まえた上で最後に、映像人類学の現代社会における意義と役割について考察する。渋沢民俗学において映像はあくまでも補助メディアであったという指摘がある<sup>(69)</sup>。だが、渋沢にとって映像人類学という手法が必然的なものであったことは既掲の事例によって明らかである。歴史的には、映像は文化的な現象の記述の際の「分析のための道具」の1つとしてしかみなされてこなかった。民族誌を表す際にも文字としての発表の一部もしくは資料程度の補助的な役割しか果たさないと考えられてきたのである。しかも日本において映像人類学は文化人類学の最下位に置かれていた<sup>(70)</sup>。デイビッド・マクドゥーガル *David MacDougall* はこのように映像をアカデミックな論述に対して付加的な対象としてとらえる傾向を批判し、人の知識と映像の関係を感覚の多様な動きの中でとらえる重要性を指摘している<sup>(71)</sup>。映像は記録する者の心を対象者に同化させる作用がある。撮影をしているうちに対象者の気持ちになったり、時には同じように泣いたり笑ったりしていることもある。実際にアチックフィルムを観察してみると、確かに撮影技術的な面では未熟な点も散見される。急いでいたのか時間が足りなかったのか、手持ちカメラでの撮影が多用されている。カメラを振り回しただけのようなショットや何を撮りたいのか意図が伝



わりづらい映像もある。そのため一見、場当たりの補完記録として映像を利用したように思えるかもしれない。しかし、人々に向けられたカメラの視線は優しく、モノを記録する際にはヒキやヨリなどのショットを含め細部まで丹念に撮ろうと努めている。それらの映像からは、洪沢が映像という媒体を介して民たちの心に近づき、民たちの心でその先にある生活や習慣、文化を理解しようとしていたことが伺えるのである。

人類学のフィールドに映像を応用してゆくためには、映像の「魔術」とも言える作用に十分な注意を払わなければならない。ダイアン・ヴォーン *Diane Vaughan* らは映像メディアによって社会学の知見が活用される時に生ずる「歪曲」「倭小化」「偏向」の危険性を指摘している。ウルリッヒ・ベック *Ulrich Beck* は「社会学者の研究成果がジャーナリストらによって利用される時、再解釈され、彼らの目的に即して変容される<sup>(72)</sup>」と述べた。丹羽美之は、映像を用いたフィールドワークに関する問題点として「カメラが持つ暴力性」「支配的な映像文化による影響力」「研究者の映像への過信」などを挙げている<sup>(73)</sup>。これらの映像人類学への警鐘は、撮影というプロセスを経ることでの「事実の塗り替え」、撮影者や映像を観る者の先入観による「解釈のズレや思い込み」の2点に集約される。それらを防ぐためには、ジャン＝ピエール・オリヴィエ・ドゥ・サルダン *Jean-Pierre Olivier de Sardan* の「民族誌規約」を指針とすることを提示したい。サルダンは、撮影された記録映像が研究用の民族誌的映像として成立するためには真実を主張する「倫理的条件」と真実味を加味するための撮影・編集上の「技術的条件」という2つの「リアリズム規約 *realism pact*」だけでなく、撮影された登場人物の世界観に近づく道を開く「登場人物の視点」と登場人物に同一化するために言語をなるべく用いないで映像で語る「記述性」という2つの「民族誌規約 *ethnographic pact*」が必要不可欠だと述べた<sup>(74)</sup>。これを著者なりに解釈してみる。まず基本的に、記録者に倫理観や技術力が備わっていることは当然であろう。技術に関しては、必ずしも記録者が撮影者や編集者でなくてもよいと考えられる。丹羽が述べるように、記録者・研究者の映像への過信や思い込みを回避するためにあえて他者の視線で物事をとらえることも大切だからである。登場人物の視点に立つもしくは近づくということに関してはまさしくルーシュが唱える「共有」の理念そのものであり、洪沢がモノを通じてそれを使う人の立場に近づこうとしていたことにも通ずる。記述性に関してはピーター・エルサ *Peter Elsass* による民族誌映画に関する興味深い分析がある。エルサはコロンビアの先住民アルワコの映画を2種類作って実験を行った。1つはインフォーマントがコメントなしで語りかける「自己提示型」、もう1つは記録者がナレーションを通して自分の見解を明示する「自己反映型」である。その両者を西洋とアルワコの両方の観客に上映してみると、西洋の観客には「自己提示型」より「自己反映型」の方が支持を得たという<sup>(75)</sup>。このことからわかるのは、映像は観る者に記録者の意図が伝わらないと賛成することも反対することもできない、単に印象の薄い作品になってしまう可能性があるということである<sup>(76)</sup>。ナレーションの必要性に関しては、記録した映像の用途に拠るところが大きい。研究用の民族誌的な映像の場合には「神の声」と呼ばれるナレーションをなるべく排除した形がよいことは確かである。だが、大衆を訴求対象にした民族誌的なテレビ・ドキュメンタリーなどの場合にはある程度、状況説明や登場人物の心情を代弁するようなナレーションがあった方がよいということもあるだろう。いずれにせよ、映像というメディアは暴力性も含めた強大な威力を持つことを記録者は肝に銘じなければならない。映像人類学を極めるためには、洪沢が実践したようにデータなどの量的調査に基づく徹底的な下調べやリサーチを経て参与観察などの質的調査を行い、現地の人々の気持ちや視線になってモノや事象を見つめ、時には共有し、謙虚な姿勢で映像記録を行うことである。

以上のように、渋沢民俗学にこそ映像人類学の社会的意義や役割に関するヒントがある。渋沢のフィールドワークの現場は都市部から遠く離れた僻地がほとんどであった。その僻地で見たこと、得たモノをアチックミュージアムに持ち帰り、その実像を分析しようとした。まさに梅棹忠夫が述べる「遠近遙かに隔たった二様の視点を持ち、虚実を見極めること」を実践していたのである。幼い頃に生物や事象に対する感覚を育んだ渋沢は、祖父・栄一から引き継いだDNAとも呼べる天性の才能があったとはいえ、自分がいる位置と庶民の位置、日本と同じ日本にありながら辺境である場所、占領国である日本と植民地といった「隔たった二様」を比較する眼を研ぎ澄ませる努力を怠らなかった。その姿勢は見習うべきである。映像人類学はかつてその映像の作用や強大な力でグローバル化を実現した。しかし、急激な情報化の中で人々の価値観は多様化し、今度は逆にグローバル化の見直しが迫られている。そんな現代社会においてこそ、他者の事象に関心を持ちその表象から有用な視角や知見を学び取ろうとする柔軟な姿勢が求められている。著者が過去の論文の中で提言したように、世界の途上国の環境、開発、ジェンダーなどの問題を映像に記録しそれを伝え、またその映像を通じてその現状を知ることでそれらと向き合い、自分たちの問題として共有し、解決法を見出してゆくことが必要なのである<sup>(77)</sup>。情報社会の中で益々、社会問題は多様化し予測不可能になってきている。そういった状況にあるからこそ、問題の解決方法を見つけ出すためには先入観や固定観念、そして今までの常識を捨て去る「アンラーン *unlearn*」すなわち、学び壊しが必要なのである。「果たして首狩りは野蛮な行為なのか」ということを自らに問うてみる必要がある。映像人類学はそのための有効的な手段となり得るだろう。映像人類学における今後の大きな課題は、映像資料を文化資源化・社会化して万人で「共有」し、更に次世代へと継いでゆくアーカイブズ研究である。渋沢も映像や目録、資料のデータベース化を目指していた<sup>(78)</sup>。アーカイブズとは「記録保管所」を意味する言葉だが活用されず保管されるだけでは意味がない。その研究考察については次の機会に譲りたい。

渋沢が時代を先見し模索したアチックミュージアムでの試み、そしてその実現のために使ったマテリアルカルチャー論という手法。それらの根底には、日本国家のため、当時の社会のためという渋沢の考えがあったことは言うまでもない。それをなし得ることができたのは、生まれ持つての財力があったからだという指摘も正しい。だが、少なくとも渋沢が「民俗学」の探求と「経済」の発展の間で悩みもがき続けたことは定かである。民俗学者でありながら経済人でもあった渋沢は、利潤を生まず産業化もできないものでも社会全体やしいては庶民、私たちひとり一人にとって必要なものがあることを知り抜いていた。渋沢の経済観は、国力の発展に寄与する産業や大資本への着目だけでなく小生産者への視線を持ち、また生産製造の面だけでなくそれと一対をなす消費者・需要側を重視するものであった。

渋沢は盧溝橋事件が勃発する2か月前の1937年5月を最後に、現地調査による撮影を終えている。そして戦後は、GHP介入の下において日本経済を立て直す大蔵大臣の役を担っている。その時に渋沢が実行した改革の1つに漁業制度がある。この改革はわが国の漁業史上において重大な意義を持つものであった。要となった1950年施行の新漁業法の狙いは「漁業民主化」と「漁業生産力の発展」を同時に行う点にある。漁業民主化は、一部の者が独占して漁業権を持つのではなく漁業協同組合が免許を持ち皆で資源を共有し経済を活性化させるものである。漁業生産力の発展は、ある海区の漁業を総合的に調整して海区全体の漁業生産量を引き上げることであり、個人の生産力にとらわれず大きく海区全体から考えていこうという考え方である<sup>(79)</sup>。「塩の専売制度」と対極にあるようなこれらの改革の発想の源が、戦前にフィールドワークとして行った塩の調査にあると言って

も過言ではないだろう。渋沢は日本の近代化は諸外国や欧米だけでなくアジア諸国との関係性の中で成り立っていることを確信していた<sup>(80)</sup>。だからこそ、塩という水産資源を通じて日本全国のみならず周辺諸国も含めた海区全体の島国をフィールド化する「海のネットワーク構想」を夢見ていたのではないだろうか。それはまさしく「コモンズ論」の実践であった。そしてその考え方には「限られた資源や決して豊かとはいえない環境下にあっても、互いが力を合わせることで強くなれる」というアイデンティティと信念が溢れている。渋沢はフィールドで人々の生活、村の共同体、習慣や習俗を継承する繋がりの大切さと向き合いながら映像に記録することで自らを見つめ、コモンズ的な経済思想を昇華させていったのである。このように映像はその情報を受け取る者に影響を与えるだけでなく、情報を与える側にも大きな作用を及ぼす。渋沢は映像人類学を極めたことで、自らの思考からの脱却をなし得た。渋沢にとって漁業制度の改革は、映像人類学を極めたことの成果と言ってよい。そしてその事実こそ、未来における映像人類学の可能性が隠されている。私たちはそれを探し当てなければならない。

渋沢敬三は「南島見聞録」の中で述べている。

「今までの学問には民族全体から見ての血が流れていなかった。あまりにも特殊な人々の盛衰のみであった。この欠点は人類学や民俗学がこれを補填する役割を持つ。そして我々日本民族の生活を如実に研究することによって、我々自らを知らんとする欲求が今や熾烈になってきた今日、我が版図内の各種民族に対して同様の学問の発展をねがうも無要ではあるまい<sup>(81)</sup>」

## 【注】

- (1) 分藤大翼「先住民組織における参加型映像制作の実践—共生の技法としての映像制作—」、『アジア太平洋研究』第36号、成蹊大学アジア太平洋研究センター、2011年、38頁
- (2) 田淵俊彦「一妻多夫婚(ポリアンドリー)の選択理由—その環境的、経済的及び宗教的観点からの考察—ネパール北西部フムラでの参与観察を通して—」、『文教大学国際学部紀要』第31巻第1号、文教大学国際学部、2020年、45-66頁
- (3) 田淵俊彦「映像人類学からのアプローチによる「ジェンダーと開発」論の再考」、『ARTES』第34巻、宝塚大学、2021年、27-50頁
- (4) エリック・バーナウ『世界ドキュメンタリー史』、近藤耕一 訳、佐々木基一・牛山純一 監修、風土社、1978年、12頁
- (5) 西郷由布子「身体技法の記録—渋沢「花祭」からモーションキャプチャへ—」、『国際常民文化研究叢書』第7巻、神奈川大学国際常民文化研究機構、2014年、386頁
- (6) 村尾静二「人類と映像のコミュニケーション序説」、『科学におけるコミュニケーション2007』、総合研究大学院大学、2008年、253頁
- (7) 宮坂敬造「文化を写しとることは可能か—ベイトソンとミードの映像人類学から—」、『映像人類学—人類学の新たな実践へ—』、せりか書房、2014年、56-57頁
- (8) 箭内匡「序章 人類学から映像—人類学へ—」、『映像人類学—人類学の新たな実践へ—』、せりか書房、2014年、8-10頁
- (9) 大森康宏「共有する映像制作—ジャン・ルーシュから学んだこと—」、『映像人類学—人類学の新たな実践へ—』、せりか書房、2014年、82-84頁
- (10) 小坂亜矢子「レンズを通して：人類学における映像の可能性」、『年報人間科学』第23号第1分

冊、大阪大学大学院人間科学研究科社会学・人間学・人類学研究室、2002年、120頁

- (11) ジェラルド・ルクレール『人類学と植民地主義』宮治一雄・宮治美江子訳、平凡社、1976年、26-27頁
- (12) ---、1976年、40頁
- (13) ---、1976年、155頁
- (14) 田口洋美「映像民俗学の可能性と課題」、東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要通号5号、東北芸術工科大学東北文化研究センター、2006年、8頁
- (15) 天羽利夫「マンローと鳥—同時代を生きた二人の事績、その活用」、『北海道大学アイヌ・先住民研究センター シシリムカサテライト』第1回講座講演録、2008年、5頁
- (16) 崔吉城「植民地朝鮮の民族学・民俗学」、『世界の日本研究2002』9巻、国際日本文化研究センター、2003年、68頁
- (17) 飯田卓「渋沢敬三にかかわる研究ネットワーク(渋沢敬三を顕彰)」、『魅せる!超フォークロア:近藤雅樹ワールドの探検』大国正美・水口千里編、近藤雅樹追悼企画実行委員会、2014年、23頁
- (18) 北村皆雄「宮本馨太郎、始まりの映像民俗学」、『季刊 東北学』第2期第4号、東北芸術工科大学東北文化研究センター、2005年、116頁
- (19) 渋沢敬三「伊太利旅行記」「倫敦の動物園を見るの記」、『澁澤敬三著作集 第一巻』(『祭魚洞雑録』より)、平凡社、1992年、183-234頁
- (20) 井上潤「渋沢敬三の画像・映像資料認識」、『国際常民文化研究叢書』第10巻、神奈川大学国際常民文化研究機構、2015年、75頁
- (21) ---、2015年、77頁
- (22) 「渋沢敬三先生年譜」より、『民族学研究』第21巻1-2号、日本文化人類学会、1957年、1頁
- (23) 高城玲「アチックフィルム・写真と現地上映会—薩南十島と台湾パイワン族を中心に—」、『国際常民文化研究叢書』第10巻、神奈川大学国際常民文化研究機構、2015年、22頁
- (24) 北川前掲論文、2005年、112-116頁
- (25) 高城前掲論文、2015年、23-24頁
- (26) 宮本瑞夫「映像に見る常民生活の伝統と再生」、『国際シンポジウム報告書V 渋沢敬三の資料学—日常史の構築—』、神奈川大学国際常民文化研究機構、2014年、26-27頁
- (27) 新谷尚紀『民俗学とは何か—柳田・折口・渋沢に学び直す』、吉川弘文館、2011年、103頁
- (28) 柳田國男『民間伝承論』、共立社書店、1934年、9-10頁
- (29) 小島摩文「民具学としての物質文化研究」、『国際常民文化研究叢書』第3巻、神奈川大学国際常民文化研究機構、2013年、174頁
- (30) 渋沢敬三「アチックの成長」、『澁澤敬三著作集 第一巻』(『祭魚洞雑録』より)、平凡社、1992年、14-16頁
- (31) ----、1992年、17頁
- (32) 日本人の源流シリーズ第五弾「秘境ヒマラヤ・精霊と生きる家族たち—心の故郷・幻のナガランド」、テレビ東京、1994年2月放送
- (33) 内山田康「芸術作品の仕事—ジェルの反美学的アブダクションとデュシヤンの分配されたパーソン」、『文化人類学』73巻2号、日本文化人類学会、2008年、160頁
- (34) 渡辺文「芸術人類学のために」、『人文學報』第97号、京都大学人文科学研究所、2008年、137-139頁



- (35) ラウルナ・フローランス「モノで人間を知る—物質文化研究の新たな試み：ダニエル・ミラー編 Material cultures: Why some things matter を手がかりとして—」、『現代民俗学研究』2号、現代民俗学会、2010年、63頁
- (36) 田淵前掲論文、2021年、45-46頁
- (37) 原田健一「渋沢敬三と植民地・台湾—『台湾高雄州潮州郡下 パイワン族の採訪記録』と“The Illustrated Ethnography of Formosan Aborigines : the Yami Tribe”をめぐって—」、『国際常民文化研究叢書』第10巻、神奈川大学国際常民文化研究機構、2015年、93頁
- (38) 渋沢敬三「南島見聞録」、『澁澤敬三著作集 第一巻』（『祭魚洞雑録』より）、平凡社、1992年、55-56頁
- (39) ---、1992年、57頁
- (40) ---、1992年、64-65頁
- (41) 新潟県 HP「旧三面集落の暮らしと移転」より、  
[https://www.pref.niigata.lg.jp/sec/murakami\\_seibi/1198515650680.html](https://www.pref.niigata.lg.jp/sec/murakami_seibi/1198515650680.html)  
(最終アクセス2021年4月17日)
- (42) 長岡市 HP「山古志村の歩みと性格」より、  
<https://www.city.nagaoka.niigata.jp/shisei/cate99/gappeikyougikai/yamakosi.html>  
(最終アクセス2021年4月17日)
- (43) 実松克義「フィールドワーカー—人類学の方法論とその課題—」、『国際行動学研究』第12巻、国際行動学会、2017年、39-40頁
- (44) 小林光太郎「アチックミュージアムの研究における渋沢敬三のポジション—イトマン・移動・出漁を事例に—」、『国際常民文化研究叢書』第10巻、神奈川大学国際常民文化研究機構、2015年、119-120頁
- (45) 谷澤毅「渋沢敬三 財界人と学者のあいだ—「忙中」に「閑」を求めて—」、『長崎県立大学経済学部論集』第48巻、長崎県立大学、2015年、144頁
- (46) 渋沢敬三「日本水産史研究『豆州内浦漁民史料』序—本書成立の由来—」、『澁澤敬三著作集 第一巻』（『祭魚洞雑考』より）、平凡社、1992年、563頁
- (47) ---、1992年、14頁
- (48) 原田健一「モノをめぐる渋沢敬三の構想力—経済と文化をつなぐもの—」、神奈川大学『国際常民文化研究機構年報』第1号、神奈川大学国際常民文化研究機構、2010年、33頁
- (49) 川越仁恵「非言語情報を用いた新たな経営史分析手法の提起—渋沢敬三の社会経済思想と日本実業史博物館構想をヒントとして—」、『経営論集』第26巻第1号、文京学院大学経営学部、2016年、24頁
- (50) 原田前掲論文、2010年、36頁
- (51) 河岡武春「『塩俗問答集』解題」、『渋沢敬三. 上』、渋沢敬三伝記編纂刊行会、1979年、226-228頁
- (52) 渋沢敬三「日本水産史研究『塩—『塩俗問答集』を中心として—」、『澁澤敬三著作集 第一巻』（『祭魚洞雑考』より）、平凡社、1992年、362-363頁
- (53) ---、1992年、329-363頁
- (54) 小林光一郎「アチックにおける隠岐調査—アチック研究史における隠岐調査の位置づけ—」、『神奈川大学日本常民文化研究所調査報告』第26集、神奈川大学日本常民文化研究所、2018年、193頁

- (55) 前田廉孝「明治・大正期日本の食塩市場と塩専売制度をめぐる経済史的研究の意義と課題」、『史學』88巻1号、三田史學會、2018年、30頁
- (56) ---、2018年、52頁
- (57) ---、2018年、34頁
- (58) 駒井和愛「渋沢敬三先生を囲んで塩の民俗を語る(座談会)」、『民間伝承』第23巻第4号、六人社、1959年、23頁
- (59) 許英蘭「植民地農村日常の記録と日韓交流の記憶—1936年蔚山「達里調査」を中心に—」、『北東アジア研究』第27号、島根県立大学北東アジア地域研究センター、2016年、61-62頁
- (60) 羽毛田智幸「薩南十島調査とその後への影響」、『国際常民文化研究叢書』第10巻、神奈川大学国際常民文化研究機構、2015年、169-170頁
- (61) 実松前掲論文、2017年、36頁
- (62) ---、2017年、41頁
- (63) 奥野卓司『情報人類学の射程 フィールドから情報社会を読み解く』、岩波書店、2009年、62-73頁
- (64) 村尾静二「映像人類学の新たな課題—方法論から認識論へ」、『民族通信』131号、国立民族学博物館、2010年、30頁
- (65) 高城前掲論文、2015年、43頁
- (66) 渋沢前掲書、1992年、38頁
- (67) 原田前掲論文、2015年、93頁
- (68) 小島前掲論文、2013年、172頁
- (69) 飯田卓「昭和初期の公共視覚メディア—渋沢民具学における映画と博物館—」、『国際常民文化研究叢書』第10巻、神奈川大学国際常民文化研究機構、2015年、260頁
- (70) 糸林誉史「メディア人類学—マス・メディアに媒介された文化形式の民族誌」、『文化女子大学紀要 人文・社会科学研究』14号、2006年、99-102頁
- (71) 川瀬慈「《特集》人類学と映像実践の新たな時代に向けて 序」、『文化人類学』80巻1号、日本文化人類学会、2015年、2頁
- (72) 京谷栄二「パブリック・ソシオロジーをめぐる国際論争」、『長野大学紀要』第33巻第1号、2011年、23頁
- (73) 丹羽美之「交差する映像と学—映画・テレビ・デジタルメディア—」、『日本都市社会学会年報』2011巻29号、日本都市社会学会、2011年、42頁
- (74) 飯田卓「異文化のパッケージ化—テレビ番組と民族誌の比較をとおして—」、『文化人類学』第69巻第1号、日本文化人類学会、2004年、146-147頁
- (75) Peter Elsass “Self reflection or self presentation a study of the advocacy effect”, 『Visual Anthropology』 Volume 4 Issue 2, 1991
- (76) 小坂前掲論文、2002年、122頁
- (77) 田淵前掲論文、2021年、33頁
- (78) 井上前掲論文、2015年、85頁
- (79) 恵山町史編纂室編集『恵山町史』、函館市恵山支所、2007年、806頁
- (80) 原田前掲論文、2010年、34頁
- (81) 渋沢前掲書、1992年、65頁

## 【参考文献】

- 佐藤健二「研究援助の精神—渋沢敬三とアチック・ミュージアム」、『公益法人』14巻19号通号155号、全国公益法人協会、1985年
- 山永尚美「書評：宮本瑞夫ほか編『甦る民俗映像—渋沢敬三と宮本馨太郎が撮った1930年代の日本・アジア』」、『GCAS Report 学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻研究年報』Vol.9、学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻、2017年
- 大森康宏「映像人類学から映像アーカイブズへ」、『総研大ジャーナル』13号、総合研究大学院大学、2008年
- 木村裕樹「紀行文と旅映画—渋沢フィルム《飛鳥》を事例として」、『映像人類学〈シネ・アンスロロジー〉—人類学の新たな実践へ』、村尾静二・箭内匡・久保正敏 編、せりか書房
- 樫村賢二「昭和9年、10年の隠岐採訪からみるアチック・ミュージアム資料」、『神奈川大学日本常民文化研究所調査報告第26集 アチック・ミュージアムの調査活動に関する基礎研究—「隠岐」調査の検証・分析と民俗学的考察—』、神奈川大学日本常民文化研究所、2018年
- 浜田弘明「「渋沢フィルム」の景観分析とその課題—朝鮮半島多島海を事例として—」、『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』2巻、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2005年
- 浜田弘明「「渋沢フィルム」撮影地の景観変貌—韓国・蔚山を事例として—」、『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』3巻、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年
- 浜田弘明「景観研究資料としての「渋沢フィルム」の今日的意義—韓国南部を例に一」、『神奈川大学21世紀COEプログラム 第2回 国際シンポジウム 図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く』、神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議、2007年
- 八久保厚志「渋沢フィルムの図像解析とその応用 第1部 渋沢コレクションの図像解析とその応用」、『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』1巻、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年
- 須山聡「渋沢フィルムの図像解析とその応用 第2部 渋沢フィルムの現地比定—奄美大島を事例として—」、『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』1巻、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年
- 原知章「メディア人類学の射程」、『文化人類学』69巻、日本文化人類学会、2004年
- 伊藤悟「人類学的映像ナラティブの一探究—民族誌映画制作における協働と拡張される感覚」、『文化人類学』80巻1号、日本文化人類学会、2015年
- 川瀬慈「映像民族誌の新たな時代」、『民族通信』146号、国立民族学博物館、2014年
- 茂木栄「映像民俗学のこれから—映像資料の電子メディア活用の試み」、『国立民族学博物館調査報告』35巻、国立民族学博物館、2003年

